

JFA アカデミーの組織的研究 ～JFA アカデミー福島の創設と取り組みに着目して～

Systematic study of JFA Academy FUKUSHIMA ～Focusing on the initiatives and the creation of JFA Academy FUKUSHIMA～

1K10C447-5 山口 潤
主査 太田章 先生 副査 礒繁雄 先生

【目的】

本研究の目的は、質的調査を通して、JFA アカデミー福島の創設理念や現状把握をすることで、日本サッカーの発展及び強化の可能性についての方策を探っていくものである。文献や書籍などから現状を把握し、2006年（平成18年）4月から開校されることとなったJFA アカデミー福島の運営・取り組みによって、日本サッカー界に起こる変化や実態を調査する。

開校・運営して8年目（2013年度を含む）を迎え、3期生までの一貫指導の最終年が終わり、そこで挙げた成果や課題が、結果や数字としても生まれてくることが予想されるので、そこを調査することで、今後の方策を提案していく。

【方法】

書籍やデータによって、歴史と創設におけるねらい、JFA アカデミー福島の理念や活動内容について、現状把握を行う。JFA アカデミー福島の開校・運営と、その成果や課題に関する調査としては、数字として挙げられる成果として、JFA アカデミーのホームページから、卒業生の進路先のデータを引用する。

それらを踏まえて、JFA（日本サッカー協会）技術委員会委員長アカデミーダイレクターを務め、日本サッカーにおける育成年代担当の山口隆文氏にインタビューを行った。インタビューは半構造化インタビューを用いた。事前に質問事項を作り、それをもとに1対1の形式でインタビューを行い、そこで生まれた疑問や質問に応じて、追加質問を行った。進路先のデータは、インタビューの質問に応じて、適宜参考資料として用いた。

【結果】

山口氏へのインタビュー調査と、その際に用いたJFA アカデミー福島の卒業生の進路先のデータや、書籍を踏まえた上で、JFA アカデミー福島創設・運営における、日本サッカー協会（JFA）のねらい、運営にあたり、問題点や課題を導き出すことができた。

JFA アカデミー福島がスポーツ界（サッカー界）に与えると考えられるポジティブな影響として、以下の4点が挙げられた。

- （1）日本のスポーツ界にとってのモデル
 - （2）日本サッカー界にとって日本を背負える選手育成
 - （3）日本サッカー界にとって育成年代の育成方法
 - （4）エリート養成、グローバルな人材育成
- また問題点・課題としては以下の3点とする。

（1）プロサッカー選手育成の確率

（2）JFA アカデミーが掲げる理念や育成方針と選手の考えとのギャップ

（3）JFA アカデミーの取り組みの認知度

このポジティブな影響と問題点・課題を考慮し、JFA アカデミー福島がさらに発展するための課題と方策を提案していく。

【考察】

日本サッカーをさらに発展させるべく始まった前例がない取り組みではあるが、恐れて踏み出さないのではなく挑戦していくこと、そこで出た課題に対し、目を背けることなく前向きに真摯に改善に向かう姿勢で、創設・取り組みがなされていることがわかった。その中で、調査から、今後の発展のための課題を挙げ、そのことについての方策を提案した。

①□ プロサッカー選手育成の確率の向上

②JFA アカデミー福島の取り組みの認知度の向上

①では、Jリーグの下部組織とJFA アカデミー福島からプロ選手になる確率論で言えば違いはほとんどないという現状に対し、日本サッカー界を背負う人材を育成することが目標としてあるならば、まずは直接的に日本を代表するような選手を育成し、その人数を増やすことが重要だと考える。そうすることによって、プレーする環境や学校教育といった教育界との連携など、JFA アカデミー福島全体の取り組みについて、モデルケースとして活動していく組織が増えることにつながるのではないかと考えられる。

②では、親元を離れて寄宿舎生活をすることにに対するリスクからJFA アカデミーを選ぶ数が多いこと、優秀な選手達が地元に残って親元から通うという考え方が根強いこと、各地域にあるJリーグの育成環境が育ち、中学・高校の良い指導が成されているという現状に対し、日本サッカー界を取り仕切り、舵取りをしていく組織であることを考えれば、他の組織とは違う特徴や特色を明示し、全国各地にその認知度を上げることができれば、数多くの子ども達が集まってくると考えられる。

上に挙げた課題と方策はすべて実現可能なものであり、可能にするだけの特徴や特色・魅力を十分有していると考えられる。JFA アカデミー福島が、育成機関、日本サッカー界の情報発信基地としての認知度や価値を高めていくことができれば、日本サッカーの発展と強化につながるであろうと考える。